

## 〈国際金融パネル〉

### 日本企業のインボイス通貨選択と為替リスク管理

専修大学 清水 順子

昨今のグローバルな金融危機の影響により、日本円は米ドル、ユーロなどの主要通貨のみならず、東アジア通貨に対しても大きく変動している。こうした為替レートの変動は、短期的に日本企業の業績に大きな影響を与えるばかりでなく、中長期的にアジアをはじめ世界中に展開する生産拠点の配置など、その経営戦略にも影響を及ぼす。さらに、この影響の度合いは、企業が輸出入における貿易建値通貨（インボイス通貨）としてどの通貨を選択しているかによっても大きく左右される。

経済産業研究所が 2009 年に実施した「日本企業の貿易建値通貨の選択に関するアンケート調査」により得られた日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択の主な特徴として、以下の五点が挙げられる。

1. 貿易取引を行っている日本の製造業の上場企業は複数の外国通貨を取り扱い、直面する為替リスクに関して、市場を通じた為替リスクヘッジ及び企業内でのマリー・ネットティングを主な手法として為替リスク管理を行っている。こうした為替リスク管理は、企業規模が大きくなるほど、海外市場への販売のエクスポージャーが高いほど活発である。
2. 日本からの輸出総額に占めるインボイス通貨の通貨別シェアは、円建てと米ドル建てが拮抗し次いでユーロ建てが用いられている。企業規模が大きくなるほど、円建てのシェアが低下し、米ドル及びユーロ建てのシェアが上昇する傾向がある。
3. 日本から欧米各国（地域）向けの輸出におけるインボイス通貨選択については、米国とユーロ圏向け輸出を中心に、相手国通貨をインボイス通貨として選択する傾向が観察され、この傾向は企業規模が大きくなるほど顕著である。
4. 日本からアジア各国向け輸出におけるインボイス通貨の大半は円と米ドルであり、相手国通貨であるアジア各国通貨はほとんど利用されていない。企業規模が大きくなるほど、円建てのシェアが低下し、米ドル建てのシェアが増加する傾向が顕著である。
5. 日本企業は特にアジア各国に設立した生産拠点としての現地法人からアジア域内及び世界全体に向けて活発な輸出を行っているが、アジア生産拠点からの輸出では米ドルが最も使用頻度の高いインボイス通貨として選択されている。

将来の選択肢の一つである東アジア共同体の構築へ向けて、日本はどのようなリーダーシップを発揮すべきだろうか。日本企業の視座に立ってこの重要な政策課題に取り組むためには、企業の為替戦略やインボイス通貨選択の実態を知ることが不可欠であり、研究者が実務家・政策担当者とともに議論を重ねることが東アジアにおける新たな為替制度構築の大きな布石となることを期待する。